郷土の美術

名古屋を中心とした地域の作家による作品や、この地域にゆかりのある作家の作品を収集しています。江戸（東京）と上方（大阪）の間で双方の影響を受けながら独自の文化を育んできたこの地域の作家たちの歩みを辿れるように、豊富なコレクションが形成されています。

《手をかざす女》1934年

鬼頭 鍋三郎

鬼頭鍋三郎は、気品ある女性像を描く画家として知られています。背の高い女性は、いま労働の合間に一休みしているところのようです。この作品の中の時刻は、季節は、いつごろでしょうか？彼女の足元を見て、何か気づくことはありますか？丁寧に見ていくうちに、いろいろな疑問が湧いてくる作品です。

《雷がくる》1979年

©MIGISHI

三岸 節子

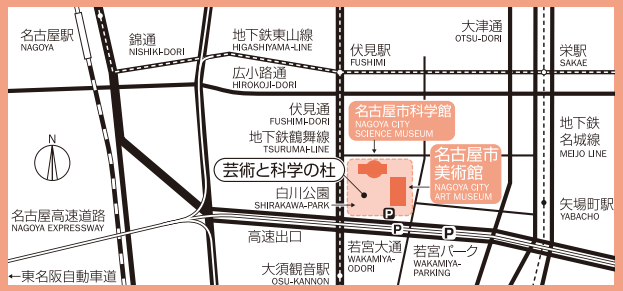
三岸節子は当時は少なかった女性の画家として、困難にも負けずに道を切り拓いて来ました。この作品では、赤い屋根の並ぶ集落の上を、急に暗い雲が覆い、いまにも激しい雷雨が降り出しそうなところを描いています。絵の中の厚く塗られた絵具や、空と屋根の色の対比から、あなたはどんなことを感じますか？

こんなことに気をつけて作品を見てみよう こんなことをやってみよう

- 作品をじっくり見て、何が描かれているか観察してみよう。
- 遠くから、近くから、見てみよう。
  ＊ 作品には、手を触れないようにしましょう。
- 好きな作品、気に入った作品をみつけよう。
- 一緒にいる人と、思ったことや感じたことを話し合ってみよう。

［開館時間］午前9時30分～午後5時、祝日を除く金曜は午後8時
いずれも入場は閉館の30分前まで
［ 休 館 日 ］毎週月曜日（祝休日の場合はその翌平日）、12月29日～1月3日
＊その他に、美術館が定める臨時休館日もあります。
［常設展入場料］小中学生無料、一般300円（250円）、高大生200円（150円）
＊（　）内は団体30名以上　＊特別展については、展覧会ごとに料金が異なります。

［ 交通案内 ］地下鉄東山線・鶴舞線「伏見」下車、5番出口から南へ徒歩8分
地下鉄鶴舞線「大須観音」下車、2番出口から北へ徒歩7分
地下鉄名城線「矢場町」下車、4番出口から西へ徒歩10分

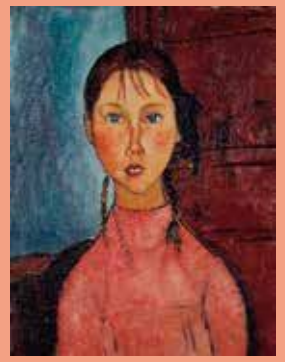


名古屋市美術館
Nagoya City Art Museum

〒460-0008 名古屋市中区栄2-17-25
［芸術と科学の杜・白川公園内］
TEL：052-212-0001　FAX：052-212-0005
URL：https://www.art-museum.city.nagoya.jp/

20,000　2025.3

常設展見学のしおり



《おさげ髪の少女》1918年頃

アメデオ・モディリアーニ

モディリアーニは亡くなる少し前に、子供の肖像を沢山描きました。この作品は、その中の一枚です。澄んだ瞳で真っ直ぐにこちらを見つめている少女は、一体どんなことを考えているのでしょうか？モディリアーニ特有の美しい線や形をこの作品の中に見ることができます。

美術館は、美術作品を集め、保存し、研究し、展示・公開する施設です。訪れる人たちが本物の作品を鑑賞することによって、感受性を養い、想像力を培い、さらには創造力を高めて、現代の文化に親しみ、その多様性を理解することを目的としています。常設展では、美術館が集めた作品を順次公開しています。名古屋市美術館のコレクションは、4つの柱に基づいて収集されたものです。このしおりでは、それら4つの柱について紹介し、代表的な作品について解説しています。

Nagoya City Art Museum

エコール・ド・パリ

パリに生き、パリを描いた荻須高徳との関連から、エコール・ド・パリと呼ばれる画家たちの作品を収集しています。エコール・ド・パリとは、1910年頃から1930年頃にかけて芸術の都パリに集まり制作をした異邦人の画家たちと、その周辺のフランス人の画家たちを指した言葉です。

《洗濯場》1958年

© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2025 G3795

荻須 高徳

荻須高徳は、若い頃にフランスのパリに渡り、生涯パリの街角を愛した画家です。この作品に描かれた建物は、水道設備が発達していなかった頃に使われていた共同の洗濯場です。がっしりとした構造の屋根や壁、貼られたポスターの色彩や文字、掲げられたフランスの国旗などが描きこまれ、人がいなくても、どこか素朴な生活の匂いや温かみが感じられます。

《クララとジュヌヴィエーヴ》1925年

ジュール・パスキン

二人の少女が手を取り合い、寄りそって座っています。淡い色彩で描かれた背景は、どんな場所かは分かりませんが、ふわふわと柔らかい雰囲気を醸し出し、彼女たちを引き立てています。パスキンは裕福な家の出身でしたが、社会の中で弱い立場の人々へ共感を抱き、たびたび彼らをモデルにして作品を描きました。

メキシコ・ルネサンス

1910年に始まったメキシコ革命を背景に活発に展開されたメキシコ壁画運動の三大巨匠（オロスコ、リベラ、シケイロス）をはじめ、カーロやイスキエルドといった、当時のメキシコで活躍した女性の画家や、ブラボー、ストランド、モドッティなどの写真家の作品も収集しています。

《トラルパム霊園のお祭り》1930年

北川 民次

北川民次はメキシコに渡り、子供たちに美術を教えました。この作品もメキシコで描かれたものです。霊園へと向かう女性たちの一人は赤ん坊を抱いています。背景には棺を担いだ行列や水浴をする女性たちも描かれ、画面には、死というものに親しみ、一方で生を楽しむメキシコの死生観が表れています。

No Image

《死の仮面を被った少女》1938年

フリーダ・カーロ

カーロは若い時に事故に遭い、手術をくり返す苦痛と闘いながら絵を描きました。絵の中の少女はレースの襟のついたワンピース姿で、骸骨のお面を被り、マリーゴールドの花を手に、裸足で立っています。彼女の横にあるジャガーのお面はメキシコで魔除けに用いられ、マリーゴールドは死者を道案内する花として墓地に供えられます。さて、この子は今どこにいて、これからどこへ向かうのでしょう？

現代の美術

この地方出身の現代美術家である荒川修作、河原温、桑山忠明を中心に、同時代に活躍した関連作家の作品も収集しています。さらに、名古屋市美術館の歩みとともに、1980年代以降の新しい現代美術の収集にも力を注いでいます。現代という時代の多様性を反映したコレクションとなっています。

《熱をもつもののなかに入れること/ 私たち》1979−80年

© 2020 Reversible Destiny Foundation. Reproduced with permission of the Reversible Destiny Foundation.

荒川 修作

荒川修作は、私たちが本来持っている生き生きとした感覚を取り戻すことを目指して作品を作りました。この作品には美しい色彩や繊細な線が多く使われています。また、文字もきれいに並んでいます。右から2番目のパネルに広い空白がありますが、この空白にはどんな意味があるのでしょう？ 私たちを思索に導く作品です。

《ピンクボート》
1992年
画像転載不可

© YAYOI KUSAMA

草間 彌生

鮮やかなピンクのボートには、布で作られた突起物が沢山ついています。ボートの本体には、本物の舟が使われていますが、突起物で覆われていて、見えません。草間彌生は、このような柔らかい彫刻を数多く作りました。どんな手触りか触ってみたくなりますが、作品には触らずに、素材や布の張り具合をよく観察して想像してみましょう。